

丹波 望 TAMBA, Nozomi

57年社会科学科卒（1期）

ICU ‘DAY’ への推挙。とても名誉なことと思いつつも なお戸惑いを禁じることができません。ICU 学生時代、湯浅先生は「人はみなユニークな存在。そのユニークさを生きなさい。」と語られ、ブルナー先生は「自然現象であれ社会事象であれ、それは天からの問いかけ。明敏な心を持ち、それに対して常に応答的。歴史に対して責任的でありなさい。」グリーン・ジョーンズ先生は「いつもパイオニア、常に開拓的であり フロントに立つ者でありなさい。」と教え、神田先生はわたしたちの卒業にあたり「君たちはICUを代表するアンバサダーである。」とのお言葉をくださいました。それらの訓えは 真実。ICU 草創期に在った者の一人として これまで それに従いひたすらに生きて来ました。

そのようなわたし。こたびのことは 国内・国外すばらしい活動をされている同窓生あまたおられる中で、「地方」に在って地味にはたらく者への配慮と受けとめますが、自分としては当然なすべきことを普通にやって来ただけのこと。何ら格別のことではないと思っています。戸惑いの背景もまたそのところにあります。

1934年生まれのわたしは「アジア・太平洋戦争」を含む「15年戦争期」に「少国民」（皇民・愛国・軍国少年）として教育を受け 大戦後の政治・経済・社会 そして思想の混乱・大変動の中に少年時代を過ごしました。この時期 最大の出来事と云えば、何をおいても「戦争とその敗北・日本国憲法の制定」ですが、わたし自身にとりましては、それに加え、「南京事件」の実相を知ることによっての煩悶と価値観の転換を挙げなければなりません。「実態として あの戦争に大義はなかった。これから生きるべきは キリストの十字架に象徴される贖罪・隣人愛。中国に対する償いを含め奉仕の業に生きよう」と思いました。

18歳の春 開かれた道は 折しも開学したICU語学研修所（LI）への入学。結果としてここで5年間学ぶこととなります。言うまでもなく この大学は、人権・非戦平和を内容とする国際主義を基調とし キリストの愛の精神において「新時代を担う」若者を育成することを願いとする学校です。その理念に加え、前述した諸先生との出会い！（まさに 全人格を以てわたし共の教導に当たってくださいました。）さらに 開拓者魂を共有する同期の仲間達との交わり。すべてかけがえのない財産。今日わたしの生の基盤となっております。

ICU 卒業後 東京神学大学を経て牧師である父の許、故郷 能代教会で教会のはたらきに携ります。しかしやがて、教会はその説くところ 在り様において、悩み多い現代人に対し有効に機能していないのではないかという問いがわき起こり、さらに生活の資を得るために始めた教育の働きを通し、知識ではなく 学ぶこと・生きることの意味を求める学生、さらにはわが子の心の指導に苦悩する親たちの姿に触れるにつけ、このような問い・悩みを共有することこそが実は牧師の仕事なのではないか、コミュニティ全体が教会、神の家族なのではないか。そこにある一人ひとりが真の自己発見（これは同時に神の発見ということ）に至るという意味での教育の働きこそなすべきことではないかと考えました。「これからは教育を通じ地域の牧師となろう。」こうして 教会担任牧師を辞し、中学・高校一貫指導を軸とする「地の塩塾」を開設。続いて塾生父母たちを中心に市民一般に向けた市民的

講座を定期的に開くようにし、これを「地の塩塾学園」と呼びました。これまで取り上げたテーマは様ざま。これにはまた折おりに ICU 同期の友等が遠路、それぞれの専門分野をテーマに講師として奉仕してくださいました。ICU において結ばれた絆、その友情に深く感謝しています。

そして 35 年。気が付くとこの地域は 日本でも「少子・高齢」最先進状況をむかえていました。少子化の中、「6 年制高校」の実現は夢に留まり、一方高齢化については この状況を担う看護・介護職を養成することがまた新たな教育課題となります。これに対応するため これまでの同窓生また父母を中心に、広く市民に参加を求め、難題続出する中、1998 年「秋田しらかみ看護学院」を創設、「畏敬の念」に生きる看護職を世に送り出し、今日に至っています。卒業生の多くは県内、20%は首都圏で医療活動を担っています。

しかし時代はこれに留まることを許しません。背景は高齢化の「激進」！（その背後には極端な少子化があります。）看護学院開設時 25%であった地域の高齢化率は 10 年余を経た今、35%に迫ろうとしています。これに対応するため看護学校開設直後から介護員養成に取り組むことを迫られこの作業に着手しました。（「介護保険法」の成立は 1997 年、施行は 2000 年です。）いま その働きは「施設介護」から「訪問・在宅介護」に軸足を移し、看護師の働きも「病院から地域を基盤とするものへ」、内容も「治療から予防・保健へ」変わることを求められています。これが看護師養成の直面する課題です。

付言すれば ここ北東北の経済不況・地域力低迷には深刻なものがあります。その中にある 介護員の養成は 実質「失職者・無業者の就業訓練」、それもしばしば「生活支援」とセットになって行われます。これが現時における養成訓練の実態です。

さらに二つ、取組んでいることに ①自死予防対策 ②非戦・平和 の問題があります。

秋田県はここ 18 年間連続して「自死率」国内第一位！自死といってもその原因・背景は多様。10 年前まで この地域において 自死の背景には事業主の経営破綻があり自死者も 50 歳台がその中心でありました。いまそれは後期高齢者、独居老人を中心とし、その背景には「老人の孤独・孤立」、さらにはそれを支えるべき地域力の劣化の問題があります。老人の精神的自立は急務です。人間のいのちを護ることを使命とする看護師養成機関として、何よりも「地域の牧師」として この問題に鈍感であることは許されません。

次に平和の問題。「最大の破壊は戦争。戦争は人間の生命のみならず 広く人間そのものを破壊する。」看護師の教育は「平和の教育」に至らざるを得ません。それ抜きに、人間の生命 それも生物学的生命を護ることだけでは意味を成しません。「人権」を含め、「人間のいのちを護ること」と「平和を護ること」とはひとつのこと、窮極的に それは「人間の尊厳を護ること」と理解します。

これまでの歩み、振り返って「問い」とそれへの対応の連続。そこにはまた「地域とその時代状況」がありました。したがってその取り組みには、地域民の理解と支援、いや問題への自覚と主体的参加が不可欠。これからも変わることのない課題です。目指すところは 協同による「郷土の創生」！傘寿を迎え、はたらきすべてに ICU とそこでいただいた教育を憶え 感謝の念を新たにす昨今です。

栗山 昌子 KURIYAMA, Masako

59年人文・社会科学科卒（3期）

サンフランシスコ平和条約発効の年に高校に入った私は、これからは日本も国際社会の一員として平和を求めつつ外国の人たちと対等につき合っていくとの喜びと決意を抱いた。自分たち若い世代こそが率先して外へ飛び出して行き、新しい道を切り開こうとの気概を持って選んだ大学がICUであった。私も、桜並木もクラスメートもみんな若く希望に燃えていた入学式を、昨日のこのように思い出す。

私の選んだこの大学は、「明日の大学」を目指していた。それは与えられたものを学ぶだけではない、ファカルティーも学生も共に考え、一緒に大学を作っていくという大きな構想の下にあった。その環境の中でパイオニアスピリットが育てられ、自由な発想が培われていった。アドヴァイザーの指導の下、上級生とも一緒に切磋琢磨の学びの機会が豊富に与えられていた。卒業後、私は、外交官であった夫と共に国際社会に係わりつつ行く道を歩んだ。夢中で過ごした日々には、新しいことに直面して、とまどうことも多くあった。その中で試行錯誤をしながらも前進しようと努力するとき、常に背中を押してくれたのはICUで学んだ開拓者精神であったように思う。

またICUには、支えの輪というものが様々な形で存在している。アメリカの小さな村で出会ったお年寄りから、ICU創設のための祈りと献金が続けられていたことを聞かされ、大変に驚き、感激した。原子爆弾投下への贖罪の気持ちからとはいえ、民主主義を理解する新しい世代を日本に育てようと、アメリカの色々な場所の教会で硬貨を握って献金をしてくれたクリスチャン達との輪を忘れてはならない。このような日本の将来を思う人々の真摯な「祈りの輪」により支えられてきたICUで、多くの新しい生き方を学ぶことが出来たのは本当に有り難いことであった。

そして「ICU同窓生の輪」。小さな大学であるために、仲間意識も強い。そしてリベラルアーツであるが故、種々の場所に卒業生が活躍している。みんな頼りがいがある。この輪の中にいると、なぜかほっとする。私には同窓生や友人との輪、家族やその時まわりにいる人たちとの輪がいくつもあつた。それらが重なり合って波紋のように広がっている。その大きな輪、小さな輪に私は常に支えられ、助けられてきた。おかげで、実り豊かな人生を過ごせたと大満足している。

駐米大使としての夫の最後の公式訪問地は、ひまわり油の産地でもあるノースダコタ州であった。初冬であったので、見たのは華やかな美しい黄色の花ではなく、枯れて頭を下げた黒い芯だけが一面に残るひまわり畑であった。その姿を見て、ひまわりが油を作り、実際に人の役に立つのはこれからののだと自分と重ねて実感し、強く励まされた。これからも、パイオニアスピリットを持ち続け、必要とされる場にあつて頑張っていきたいと思っている。若い世代の人たちに自分の経験を語る機会を大事にし、ピースベルなどを通しての母校への「恩返し」の輪」に参画し、この輪をもっと新しく広げていければと願っている。

DAY賞をいただくのは、晴れがましく、またおこがましくもあるのだが、この賞がICUに対する私の感謝の気持ちを表す機会ということになるならば、喜んでお受けしたいと思う。ICUは、今でも当初からの良き伝統を保ちながら、なお新しい挑戦を重ね、世代に応じて大きな飛躍を続けている。そういう母校の姿を見せて貰っていることは実に誇らしい。また嬉しい限りである。

追記：書き尽くせないところ「若き友へ・生きる意味を求めて 秋田稔先生ほか同窓生による」（ヨルダン社）「ICU三期生・卒業後50年の歩み」等に寄稿した私のエッセイ、「今を輝く同窓生たち」インタビュー記事を参照していただければ幸いです。

土屋 隆一 TSUCHIYA, Ryuichi

63年自然科学科卒（7期）

今までの人生の節目節目で下した「決断」を100として、現在その「判断」の是非を振り返ってみますと、正しかった・良かったと思える「決断」は2割以下の様に感じられます。その都度、熟慮した積もりですが、全く「間違っていた」と迄は云いませんが、別の「決断」をしていれば、もう少し良い人生が有ったのではと思うことも有ります。

そう言う中で、私のベストの「決断」は、合格した3つの大学の中からICUを選んだことと確信しています。

90年代にUS News & World Report誌の名物column“Best Colleges”の編集長Elfin氏が「・・・教育とは、詰まるところ、誰と出会うか、どんな仲間“peer group”と仲良くなれるか、彼らから学び、また自分のほうから教えることもある・・・」と云っています。

趣旨が少し外れると思いますが、宗教哲学者の山折哲雄先生は、その著書「義理と人情 長谷川伸と日本人のこころ」で「長谷川伸賞」を一昨年受賞されました。その受賞の挨拶の中で「・・・正邪善悪で人や物事を判断することを止めました。・・・人や物事を判断する際のもっとも確かな基準は義理と人情です」と云われました。

私は、ICUで素晴らしい恩師・STAFF・先輩・同輩・後輩の知遇を得ると言う幸せに恵まれました。小・中・高・会社でも勿論友人・知人にも恵まれました。しかし、ICUの諸兄姉（peer group）との交誼は、生涯を通した最良のものであります。

ICUは、学びの館です。知識を広げる、信仰を得る、はたまた人生の伴侶を得ることは当然あるでしょう。しかし、私が考えるICUの教育の本質は、多感な青春時代に、豊かな自然の中で、少数精鋭の仲間が集って、共に学び合う、切磋琢磨しあう、そしてお互いの友情を育むことに有ると思います。知識や経験は、卒業後にも得ることが出来ます。勿論ICU同様素晴らしい大学は多々有ります。

しかし現役の皆さんに、特に申し上げたいのは、折角ICUに入ったのです。ICUでしか得ることが出来ないもの「友人＝一生の宝物」を得ることを強く意識して下さい。きっと数十年後には喜びを実感し、感謝して貰えるものと信じています。

池 央耿 IKE, Hiroaki

64年人文科学科卒（8期）

大海の一粟

隙（ひま）ゆく駒と言ひ、白駒（はっく）隙（げき）を過ぐとも言う。馬が一瞬にして壁の隙間をよぎるところから、光陰矢のごとしと同じ、月日の経つのは疾（はや）い譬えである。平安末期に成立した『千載和歌集』に三河内侍の一首がある。「いかで我ひまゆく駒をひきとめて昔に帰る道をたずねん」してみれば、これはまた時間が不可逆である含みとも取れる。過ぎた時間は泣いても笑ってももとは戻らないから、後にふり返って、あの時どうしていれば、こうしていればと悔いたところではじまらない。いかにも、半世紀は隙ゆく駒だった。そのうちの四十余年、片隅に生きてずっと一つことをしてきたが、時間をいたずらに過ごした意識はさらさらしない。もとより終わりのない道だから今もって前途遼遠である。

日本語はどの語族とも類縁関係がないために、古来、受容するにせよ発信するにせよ、異文化と接触する界面に必ず翻訳を必要とした。この先どこまで行っても事情は同じで、読み捨てるの娯楽小説だって翻訳の縄張りであることに変わりはない。それどころか、地球が狭くなればその分、ますます翻訳の出番は増えると予想される。何はさておき、翻訳は原文に寄り添うことが鉄則だが、このところ日本語は激しい風化にさらされて、なかなか思うに任せない。個人の仕事はしよせん大海の一粟でしかなかりうけれども、いくらかなりと風化を遅らせることにつながればという心でやっている。このたび思いがけずもDAYの数に加えられることになったのは、そのあたりを見てくださった方々のおかげと思えば忝い。

せつかくの機会だから、ここで常々気にかかっていることに触れておこう。つい先頃、ある大学の出版局が刊行図書一千点の記録を達成した話を新聞で見た。多くの大学が何らかの形で出版部門を持ち、学際的な情報発信に力を入れている。そうした組織の連絡機構、大学出版部協会もあって年に何度か新聞全紙で刊行物を特集する。出版不況が言われて久しいが、必ずしも営利目的ではなしに本を出せるのが大学の強みだろう。ところが、同協会にICUの名はまだない。大学として出版に乗り出そうという気運があるのかどうかも寡聞にして知らないが、建学六十年の歴史を負い、口を開けば自由七科をふりまわしながら、出版に無関心だとしたらこれは断じてICUの名誉ではない。卒業生には編集者として現場で体験を積んだ古手も大勢いる。衆知を募ればこの学校ならではの企画も生まれようではないか。どうか、ご一考を願いたい。

池上 清子 IKEGAMI, Kiyoko

75年社会科学科卒（19期）

79年大学院行政学研究科修士課程修了

大学は高校とは違う！と感じた時を今でも覚えている。一年生の最初の一般教養で、絹川先生の数学をとった時だった。「平行線は交わる。」何という衝撃だったことか。頭を柔らかくしてくれたあの瞬間があったからこそ、その後、国際社会で仕事をしてこられたように思う。あの衝撃が落ち着いた後は、なぜ・どうしてという疑問に変わっていった。そして、それは、①ロバチェフスキーの世界のように、論理的でありたいという願望となり、②俯瞰的に物事を見ながら、ベストやセカンドベストなどの選択肢を見つけない、③同じものを見ても、見る角度によって見えるものが違う可能性を常に考えたい、④明確に意見を伝えて、相手の意見を聞きたいなどの想いに発展した。

国連機関と NGO とで、同じ領域の仕事に携わって 35 年が過ぎた。開発を進めて、公平性の確保を目指す国際協力の仕事だ。お母さんの健康を守るというテーマは自分の NY での出産経験がきっかけだった。そして、80 年代後半、中米のグアテマラの田舎町で、妊産婦死亡率が高い原因調査をしていた時のこと。カッチケル族という先住民が 9 割を占める地域では、女性はスペイン語が話せないため、妊娠中に異常があっても保健所や病院に行きたがらない。どうすればいいのかを地元の女性グループと話し合っ、カードを作ることにした。例えば、カードの表には出血の絵が描かれ、裏にはスペイン語で出血と書かれている。医師や看護師と意志疎通ができるようになると、保健所に行って治療を受ける妊婦さんが増えた。もう一つの活動は、村の産婆さんの再訓練だった。助産師のトレーニングを受けないで産婆さんをしている人ばかりなので、産婆さんのちょっとした気づきが妊婦さんの命を救えるという実践的な訓練を実施した。特に医師のいる保健所や病院に行くべきかどうかをアドバイスする産婆さんの力は大きかった。死亡率は大きく削減された。

大学院時代、横田先生の国際機構論のクラスでは、晴れて気持ちのよい日には、芝生に車座になって色々な議論をした。私たちは好き勝手なことを言っていた。立場が違っても、議論が終わるといつものクラスメートに戻るのだった。ICU では素晴らしい先生方に恵まれて、楽しく学んだ。今、教える立場になってみると、これが結構難しいと、思うのである。最近、グローバル人材の育成という言葉をよく耳にする。先生と学生とのつながりを重視し、自分で考える力を磨くことを目指す ICU の教育が、今、見直される時なのだと思う。

宮川 繁 MIYAGAWA, Shigeru

75年語学科卒（19期）

昨春、私はICUで初めて教鞭を取ることになりました。教科はジェネードの歴史と専門の言語学で、教室は両方とも本館でした。授業を始めてからすぐに、何か頭の中でひらめくことがありました。私がこの仕事に就くことになった理由です。ICUで献学60周年記念教授を務めることになったのを含め、他の大学でも教鞭を取ってきましたが、これは40年前に学生として本館で学んだ授業と直接関係があることを深く感じました。

すべての始まりは本館でした。10年間の米国滞在を経て帰国した時に、スペシャル・ジャパニーズを勉強したのが本館でした。また、井上和子先生のクラスで言語学という分野に出会ったのも本館でした。この時学んだ日本語のクラスは、私にとってアメリカ人であると共に日本人としてのアイデンティティーを築く強固な基礎となりました。ICUで出会った言語学のクラスは今の私の言語学研究というキャリアに導いてくれました。私のアイデンティティーとキャリアを築く大きなきっかけとなったICUに一生感謝します。

ICUがなければ、私はこのような人間としてこの場に立てることはなかったと思います。ICUよ、ありがとう。

関 啓子 SEKI, Keiko

76年語学科卒（19期）

- 1. クリスマンになる** 私は入学直後に不思議なご縁で聖書研究会「しゃろうむ」に誘われ、その活動を通して信仰を持ち、翌年5月のペンテコステ礼拝で受洗して晴れてクリスマンとなりました。将来夫として介護者として私を支援することになる人とこの教会で出会ったことはまさに天の配剤でした。人の役に立つ生き方をしたいと考え実践した結果現在の私があるのは、ICUのキリスト教理念のおかげと思います。
 - 2. 言語聴覚士(ST)になる** 専攻した言語学の学部3年時の特別授業で、ゲストスピーカーとして来学した先輩STから「失語症」の話聞いたのがきっかけで見学先の病院で失語症者と出会いその症状に驚愕するとともに、このような方を支援する職種STになろうと決意しました。言語学を学んだのもクリスマンになったのも、このためだったのではないかとすら思ったものです。その後のスペイン留学時代や銀行員時代（職務遂行上必要と考え、社会経験を積む目的で入行）も私のこの決意は揺らぎませんでした。紆余曲折の後、難関として知られた国立の養成機関を卒業し私がSTとして活動を始めたのは、「失語症」の特別授業から実に10年後のことでした。
 - 3. 研究者になる** 専門教育を終え失語症研究のために都立の医学研究所に就職した私は、さっそく研究に取り組みました。この研究所には、夫の転勤先札幌の民間病院での5年半の臨床期間をはさんで延べ17年間在職しました。その間に博士号を取得し、失語症以外の高次脳機能障害にも研究対象を広げ、大学で授業や講演を行い、多くの論文・書籍を発表して、専門領域において多少なりとも名が知られる存在になりました。
 - 4. 教育者になる** 研究所での業績が評価され神戸大学医学部に迎えられた私は、単身赴任して将来医療職に就く学生に高次脳機能障害（神経心理学）を教える教員になり、教育関連の研究科内外の役職（教務学生委員長や教育担当の大学評議員など）を歴任し、研究・臨床活動の傍ら全力を注いで職務遂行しました。
 - 5. 脳梗塞になる** 教員生活のストレスと過労が引き金となって、2009年7月に脳梗塞を発症しました。当初は半身が麻痺し話し方も障害され、専門とする高次脳機能障害を抱える状態でした。専門家としての知識と経験のおかげで大半の障害を克服し、手の麻痺と発話に障害を抱えるも発症10ヶ月後という短期間で現職復帰を果たしました。
 - 6. 発信者になる** 現在は当事者となった専門家として自分の経験を著書・講演・マスコミを通し世に発信するとともに、「三鷹高次脳機能障害研究所」所長として自分と同様の経験をした方々に対して、経験者だからこそできる臨床活動を実践しています。
- 著書:**「失語症を解く」（一般向）人文書院, 2003;『話せない』と言えるまで」（専門家・一般向）医学書院, 2013;「まさかこの私が一脳卒中からの生還」（一般向）教文館, 2014, 他。